

論文

# 盲学校における学生運動の様相

——東京教育大学附属盲学校における事例の再検討——

山口 和 紀\*

## 1 はじめに

### 1-1 問題の所在

1972年から1973年にかけて、東京教育大学附属盲学校（以下、附属盲とする）において全共闘運動<sup>1</sup>が起こった。それは同校の所在地名であった雑司ヶ谷から名前をとり、「雑司ヶ谷（ぞうしがや）闘争」と呼ばれる。授業ボイコットや討論集会が開かれ、1年ほど持続した後に収束した。この闘争は、大学から高校に飛び火した高校全共闘のひとつだと位置付けうる。

附属盲で社会科の教官をしていた岩崎洋二は、次のように雑司ヶ谷闘争を述懐する。

生徒を意識的に外に連れ出し、触らせたり、体験させたりする教育を強く意識したのもこの紛争からであった。[...] 私は、閉鎖的な盲学校というイメージがはっきりと解体しはじめた事件だったと今考えている。(岩崎 [2011:15])

雑司ヶ谷闘争が「閉鎖的な盲学校」というイメージの解体のはじまりとなる「事件」だったとする岩崎 [2011] の記述は、この闘争が及ぼした影響の大きさを示唆するものである。

雑司ヶ谷闘争が1970年代以降の視覚障害教育に一定の影響を及ぼしたことが岩崎 [2011] には示唆されているが、そもそも雑司ヶ谷闘争がどのようなものだったのか、何を動機として起こったのかも十分に明らかでない。

管見の限り、先行研究において雑司ヶ谷闘争を取り上げた研究は杉野 [1997] を除いて皆無である。杉野は盲人文化と健常者文化についての論考（杉野 [1997]）の中で、一事例として雑司ヶ谷闘争を取り上げ、生徒たちが闘争を起こした動機について分析を行っている。ただし、杉野 [1997] は後述する当事者の自伝的著述（大橋 [1998]）を引用し言及したものであり、一次資料をもとに実証的に研究したものではない。

生徒たちの闘争の動機はいかなるものだったのだろうか。杉野 [1997] はその動機を「[...] 健常者社会が盲学校を通して生徒たちに押し付けている『依存と自立のジレンマ』に対する拒否」（杉野 [1997:263]）であったと解釈する。

「依存と自立のジレンマ」（杉野 [1997:263]）とは、直接的には「三療（はり・灸・按摩）」問題のことを指している。盲学校は、生徒たちが卒業後に三療業に就き、それによって自立していくことを勧める一方で、卒業生らが障害年金や生活保護などの福祉制度に依存せざるを得ない状況を是認してきた（杉野 [1997:263]）。この「自立」を謳いつつも「依存」を是認するという態度が、杉野 [1997] のいう「依存と自立のジレンマ」である。そうした「ジレンマ」への不安や憤りを背景として、それを変えるために生徒たちが闘争を起こしたという杉野 [1997] の分析は十分に説得力がある。

杉野 [1997] の説明の中心にあるのは「三療問題」である。しかし、三療問題だけでは闘争の説明として不十分で

---

キーワード：障害者運動、盲学校、三療、自立と依存

\* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2021年度入学 公共領域

あると考えられる。それは「普通科」の闘争があるからである。雑司ヶ谷闘争の主要な部分を担ったのは高等部「普通科」である（大橋・指田・長澤・浜田・宮内 [2011:118]）。普通科はおおまかに言えば「三療以外」の進路——それはこの時代においては大学進学と、その先にある「新職業」を指す——を目指す課程である。「三療」問題が雑司ヶ谷闘争の主たる動機なのであれば、卒業後には三療業に就くことがほとんどである「理療科」が闘争の主体であった可能性が高いだろう。

しかしながら実際には、雑司ヶ谷闘争を長期的かつ集団的に闘ったのは「普通科」である。後述するようにその闘争上の課題としても三療は中心ではない。「三療」問題に対する抵抗が雑司ヶ谷闘争を引き起こしたという解釈は、それが誤りであるとは言えないが、雑司ヶ谷闘争の動機や性質を表すには一面的に過ぎる可能性が高い。

そこで本研究は雑司ヶ谷闘争を対象として一次資料に基づく検討を行う。その目的は、雑司ヶ谷闘争について直接的には三療問題を動機としていないであろう普通科を中心とする高校生の闘争に着目しながら、闘争全体の動機や背景について再検討を行うことである。

## 1-2 研究の方法

研究の方法として文献研究を用いる。

2つの資料を主として扱う。1つは大橋由昌の自伝的著作である『キャンパスにオジサンは舞う 盲学生憤闘記』（大橋 [1988]）である。大橋由昌は闘争の中心人物の一人で、大橋 [1988] には闘争の経緯を述べた章がある。

大橋は1950年に東京に生まれ、東京教育大学附属盲学校高等部普通科に1967年に進学する。高校生になり男子寮へ入寮したのが転機だったようである。曰く「[...] 酒の飲み方を寮で”勉強”し、当然のごとくタバコも寮で覚えた」（大橋 [1988:17]）。高等部普通科を目指した理由は「普通科の教員になるつもりだった」からであるが、教職の道の厳しさを感じ取り「目標はあっけなく崩れた」（大橋 [1988:20]）。そのまま高等部二部専攻科理療科へ進学し、2年生の時に雑司ヶ谷闘争を起こした。卒業後は、筑波技術短期大学の設置に反対する闘争でも主導的に動いた人物である。

主たる資料の2つ目に、2011年に出版された附属盲の記念文集『なぞれば指に 明きらけし』（筑波大学附属盲学校同窓会・後援会 [2011]）がある。同文集は大橋が編集委員長を務めたもので、雑司ヶ谷闘争を別々の立場から回顧する企画が117ページから134ページまで掲載されている。当時附属盲教官を務めていた有宗義輝<sup>2</sup>、全共闘の委員長を務めた大内厚がそれぞれ雑司ヶ谷闘争についての原稿を1つずつ寄せている。

有宗は雑司ヶ谷闘争の当時、29歳あるいは30歳の若手教師だった。大橋は「[...] 有宗先生は、率直にあって、臨床に熱心な研究者タイプではなかったと思う。当時から酒とたばこが大好きで[...]」（大橋 [2008]）と述懐している。大内厚は雑司ヶ谷闘争を通じて結成された全共闘の委員長を務めた人物である。

筑波大学附属盲学校同窓会・後援会 [2011] には座談会（大橋ら [2011]）も収録されている。出席者は前述の大橋由昌、指田忠司（昭和47年度高等部普通科卒業）、濱田登美（昭和48年度高等部普通科卒業）、長澤泰代（昭和48年度高等部普通科卒業）、宮内秀明（昭和47年度高等部普通科卒業）である。この座組みは当時、「専攻科」に在籍した者と「普通科」に居た者がそれぞれの立場から話をするという意図がある。

## 2 闘争の背景

### 2-1 東京教育大学附属盲学校について

闘争が行われた東京教育大学附属盲学校（現・筑波大学附属視覚特別支援学校）について概観する。同校の歴史は1876年の「楽善会訓盲院」設置にさかのぼる。同院はその後「楽善会訓盲啞院」、官立の「東京盲啞学校」などへと変遷した。ここまでは「盲啞」教育であったが、それが「盲」教育単体に分離したのは1909年であった。1909年に東京盲学校の設置が認可され、1910年に雑司ヶ谷に「東京盲学校」として設置された。戦後、一旦は国立盲教育学校になったが、1950年には東京教育大学教育学部附属盲学校となる。「盲啞教育分離」から数えたとしても、優に100年を超える歴史ある学校と言える。

東京教育大学（現・筑波大学）の附属校であることも重要である。東京教育大学とそれを前身とする筑波大学は、

日本の特殊教育研究をけん引してきた大学である。当然、特殊教育をめぐる政策決定にも関与しており、その影響は大きい。「日本特殊教育学会」を設立した尾島頌心、榊原清、西谷三四郎が東京教育大学の教授職であったことは、その証左である。東京教育大学の附属学校として、附属盲は先進的な教育研究の拠点となってきた。とくに盲学校教員の養成という部分で大きな役割を果たしてきたと言える。

## 2-2 「三療」問題による動機の説明

本稿の目的は「三療」問題以外の動機に着目し、この闘争を再検討することにある。そのためにもまず「三療」問題による動機の説明を概観したい。杉野 [1997:263] は、雑司ヶ谷闘争が盲学校における「あんまによる自立」という「空手形」に対する素朴な疑問から発生したと分析する。この「空手形」とはなんだろうか。当時、盲学校卒業後の進路として支配的だったのは「三療」であった。盲学校と三療が強い結びつきを持っていることは、その歴史的経緯に由来する。

「盲人＝三療」という職業的イメージは江戸時代に形成されたものである（広瀬 [1997]）。明治以降もそれは続いていくが、明治初期に大きな変化が起きている。「徒弟制度」による養成から、「盲学校」という近代的制度による教育へと変わったのである。明治初期の「盲官廃止令（明治4年）」による座特権の廃止や「医制（明治7年）」によって鍼灸医の養成が困難に陥るといった事態が、従来行われてきた「徒弟制度」をたち行かなくさせ、そこで考案されたのが「盲人鍼灸講習所」の設立であった（杉野 [1997:265]）。これらの多くは設置、廃止を繰り返し、いくつかの盲学校が生まれた（加藤 [1994:127]）。1900年代になると、一部の府県における規制強化や、取り締まりの範囲を「按摩」にまで広げる動きがはじまり、伝統的徒弟制度はその機能を喪失した（加藤 [1994:128]）。

その結果として、近代的な「盲学校」で医学を学ぶことが盲人にとって生活に必須の要求となり、「技芸科＝鍼灸」の職業教育を主体とする日本の盲学校の典型が形成された（加藤 [1997:128]）。広瀬 [2005:385] は、第二次世界大戦の盲教育界でも「盲学生は理療科（三療を学習する専攻科）コースを終えてから大学進学すべきである」「大学に行くより理療で身を立てる方が確実だ」といった考えが支配的だったとする。闘争が起こった東京教育大学附属盲学校でもその事情は同じであった。

同時に盲人の職業としての三療には危うさもある。晴眼者が三療に進出しはじめたことによって、盲人が同じ土俵で商売をしなくてはならなくなったことがその主因である。雑司ヶ谷闘争が起こった1970年代という時代は変革の時代にあたる。晴眼者が三療に本格的に進出し、視覚障害者の三療業者よりも晴眼者の三療業者の比率が高くなっていく過渡期にあったのである。厚生労働省の「衛生業務報告」によれば、三療に従事する割合は1960年には視覚障害者が55.7%で晴眼者が44.3%だったのが、1979年には逆転し前者が46.4%で後者が53.6%となっている（[吉田 1997]）。

この状況は、児童生徒たちからみれば「盲学校は『三療業での自立』の困難さを直視せずに、この職業を『もっとも安定した自立への手段』として生徒たちに提示し続けている」（杉野 [1997:262]）ように映ったと考えられる。これを杉野 [1997] は「空手形」と呼んだ。「空手形」に対する反発が闘争を引き起こしたとする分析には説得力があると考えられる。

## 2-3 他の盲学校における闘争

「三療」問題が雑司ヶ谷闘争の動機となっていたことの傍証として、東京教育大学以外の盲学校における闘争の記録がある。京都府立盲学校と和歌山県立盲学校の闘争の記録をそれぞれみていきたい。まず京都府立盲学校における「乱入事件」である。同校の生徒であった岸田典子は次のように振り返っている。

[...] 教室の窓から正門を眺めていると、ドドドと音がして、男子学生が乱入してきたのです。これが有名な京都府立盲学校乱入事件です。その中に楠さんがいました。（ぶくぶくの会 [2014]）

「楠さん」とは楠敏雄のことである。楠は日本初の全盲の普通高校講師になった人物で、京都府立盲学校を1966年に卒業した。乱入事件は1969年のことである。この事件について楠敏雄は次のように述懐する。

70年代は[...] 盲界にも業界に労働組合つくるべきだとか、労基法守らせるべきだというので。僕らが京都の盲学校で卒業式に乱入したのも、盲学校の教員が業界の体質を改善しようという働きかけをしてないということに対しての抗議。(楠 [2011])

楠が乱入した理由もやはり「三療問題」が根底にあった。他に和歌山盲学校の闘争も若干の記録が残る。当時和歌山盲学校の教員をしていた能澤義和は次のように述べる。

当時、東京教育大学付属盲学校や京都府立盲学校では、生徒会を中心とした学生運動が勃発し、一次学校閉鎖も行われるような事もありました。その影響もあり、そうした流れはこの和歌山盲学校にも飛び火したように起こっていたのでした<sup>3</sup>。

[...] 彼らいわく、理療科である自分たちをもっと大人として見て欲しい。[...] 我々生徒は卒業したら仕事をして生きていかなければならない。家族を支えなければいけない。時間の猶予はない。理療を取り巻く世の中はどんどん変化している。時代に即した授業や実技指導をしてほしいと、いうことでした。(能澤 [2021])

これらの2つの事例においては「三療」問題がその闘争の動機の中心的な部分を占めているようである。これは雑司ヶ谷闘争の動機が「三療」問題にあったことの傍証と考えることができる。

### 3 「専攻科」の闘争

#### 3-1 闘争の発端と当初の展開

闘争そのものの検討に移る。ここでは時系列的に闘争の展開を追いながら、それぞれの出来事について分析を加える形をとる。まず闘争の時系列について大きく整理する。雑司ヶ谷闘争にはその闘争を担った主体によって、大きく二つのフェーズがあると言える。一つは「専攻科」による闘争である。この専攻科の闘争は数週間で沈静化する。次に「高校生」による闘争である。前述の通り専攻科の闘争は数週間で沈静化したが、その後高等部普通科・理療科・音楽科（以降、「高校生」と称す）による運動へと展開する。その高校生の闘争も1年程度で沈静化し、雑司ヶ谷闘争は幕を閉じる。ここではまず「専攻科」の闘争の経過について詳述する。

「専攻科」の闘争はおおまかに言えば、「全共闘」運動をモデルとして引き継いだ運動だと言いうる。そこで掲げられた課題は前述した「三療」問題という具体的なものであった。

闘争の時系列的な記述に入る。闘争の発端は1972年10月28日に、松本盲学校で行われた関東・甲信地区盲学校生徒会連合の弁論大会に自ら進んで参加した二部専攻科2年の三田純一（仮名<sup>4</sup>）が、個人的理由から弁論大会を「サボった」ことにある（大橋 [1988:106]）。これに対し、学校側は生徒会顧問、クラス担任などで協議し、生徒会として三田にどのような対応をするかを検討するように求めた（有宗 [2011]）。しかし、11月3日から5日の文化祭の準備などによって対応が遅れ、生徒会は対応が決定できなかった。そこで学校側は「1週間の自宅謹慎」を命じた。これに対して、11月9日、二部専攻科2年は処分が不当であるとする「クラス決議文」を出し、教官側と反発する（大橋 [1988:107]）。

このように闘争を始めたのは「高等部専攻科」であった。では、この専攻科とは何か。附属盲学校の教育課程には幼稚部・小学部・中学部・高等部・高等部専攻科がある。このうち専攻科はつまるところ、職業訓練課程である。現在、東京教育大学附属盲学校を前身とする筑波大学附属盲学校の専攻科には、音楽科・鍼灸手技療法科（3年制、理療科が名称変更したもの）・理学療法科（3年制）が設置されている。

さらに専攻科には「一部」と「二部」がある。もともと、理療科は高等部の「本科」3年間と、「専攻科」2年間を合わせた5年課程だった。これが「一部」専攻科である。これに加えて、1959年には専攻科に3年課程の「理療科」が設けられ、これは高等部専攻科理療科「第二部」あるいは「二部専攻科」と呼ばれる。「二部」には高等部普通科から進学する場合もある。大橋由昌がそうである。当時の入学定員は定かでないが、大橋が専攻科での同級生（1973年入学）は8名、そのうち2名は途中で「ドロップアウト」し、卒業時には6名に減っていた（大橋 [1988:78]）。

専攻科の特性についても触れたい。名目上は「高等部」であるから、高校生であるとも言う。しかし専攻科には一度社会に出てから専攻科に入学した者や、一般大学に進学後、途中で視覚障害を負い入学したような者も居た。高等部普通科の学生（いわゆる「高校生」）と専攻科、その間には年齢的にも社会経験にもかい離があった。

高等部と専攻科の間だけでなく、専攻科の中にも歪みはあった。大橋 [1988:90] は、当時の附属盲には一度大学を出てから専攻科に入った者を指す「出戻り」という言葉があり<sup>5</sup>、これの背景には「理療科を嫌って大学なんぞへ行ったくせに」という大卒以外の理療科生の“劣等意識”があったようだとする。専攻科内部の多様性、それによって生まれるあつれきも見逃すことはできない。また反対に「出戻り」の側においては、別の道を模索しようとしたがうまく行かず三療に戻ったことへの、いわば「挫折感」を抱えていたであろうことは想像に難くない。

11月11日、二部専攻科2年を中心として「全共闘準備会」が結成される（大橋 [1988:107]）。準備会の会長である大内厚は「盲学校の理療科を卒業後、病院勤務を経てから理学療法科に進学してきた人で、現場経験のある視点から、当時の理学療法科のあり方を問うていた」（大橋ら [2011:117]）人物である。

### 3-3 闘争の展開——教育制度の糾弾へ

13日、専攻科5クラスが「授業ボイコット」に入り、全共闘結成・総決起集会が行われ、校庭で行われた学内デモには70あるいは80名ほどが参加した（大橋 [1988:109]、有宗 [2011:135]）。大橋 [1988:109] は「『教育方針を明らかにせよ！』、『自治権確立を勝ち取るぞ！』と言ったシュプレヒコールが校内にこだました」としている。

この時点で既に、三田の処分問題を越え、学校の教育体制そのものの批判へと焦点が移った。同日に出された要求書の内容は以下である。

＜全学共闘会議・教育に関する補足要求＞

[...]

リハビリテーション（理学療法）科

＜要求項目＞一、教官の恒久的な担当教科を明示すること・・・教育内容の充実と専門性をはかるため。 [...]

四、本校リハ科における養成方針とその位置づけを明示すること・・・（参考）本校リハ科はあくまでも盲学校高等部専攻科レベルのものであるか、PT（理学療法士の略）養成所としての格付けをもつかどうかなど。 [...]

七、教官の資格レベルの向上をはかること。

（大橋 [1988:111-112]）

ここで示された要求のほとんどは三田の処分とは直接的な関係がないものであった。教育制度の改善や、職域の拡大についての要求が含まれている。主として要求されているのは教育制度の改善である。この教育制度の改善については後述する。

### 3-4 理療教育に対する批判へ

15日、学校側は「処分ではなく教育的措置である」と口頭で回答するが、全共闘側はそれを不服として、ストライキの決行を宣言する（有宗 [2011:112]）。学校側の主張は「非合法組織は認めない」ということだったため、全共闘は「全共闘と専攻科総体はイコールである」という決議を行った（大橋 [1988:113]）。

16日、第1回の学校と生徒の対話集会が開かれた。有宗 [2011] はその中で行われた主張を次のように記している。

本校の教育は知識偏重教育であり、自主性、創造性に乏しい人間を作り上げている。理療科、普通科において自己の能力を生かす教育がなされていない。特に理療科では三療の免許を与えるだけが目標になっている。病院経験も開業経験もない理療科の教師は何を生徒に教えようとしているのか。リハ科（現理学療法科）の実態はもはや高等部専攻科レベルではありえないはずだ。（有宗 [2011:135]）

「病院経験も開業経験もない理療科の教師」について言及がなされているが、これはどういうことだろうか。附属

盲における理療科教員は「理療科教員養成施設の二年間を経て、再び母校へ『錦を飾った』ケースがあり、しかもそれはかなりの数に上る」(大橋 [1988:78]) という。この「理療科教員養成施設」とは東京教育大学附属理療科教員養成施設(現・筑波大学附属)のことで、これは盲学校で三療を教える教員を養成する施設である。大橋が述べる「母校へ錦を飾る」というのは、理療科を卒業し、理療科教員養成施設に進学、同校を卒業後に附属盲の教員として働くということである。このルートはつまるところ、東京教育大学から「外に出ない」ということでもある<sup>6</sup>。

こうした教員らとは対照的に、全共闘委員長の大内は「病院」で勤務経験を持っていた<sup>7</sup>。「外に出る」経験を持っていることは高等部専攻科の性質からして貴重である。そうした就業経験を持つ者が、数は定かでないが少なからず専攻科に居た。そうした者からすれば、一度も社会に出たことがない教員らの授業に対して、経験や知識的な非対称性が生じているように思われたとしても不思議でない<sup>8</sup>。

### 3-5 専攻科の闘争の終結——青年の主張に過ぎなかった

大橋 [1988] は対話集会について、結局のところ「青年の主張」に過ぎなかったと否定的な見方をする。大橋 [1988:116] は対話集会を次のように述懐している。

今、冷静にその場のやりとりを思い返してみれば、私達の追及は、自らが受けてきた教育に対する“不満”、あるいは“怒り”をヒステリックに発表した、すなわち“青年の主張”に終わってしまったと解することができよう。けれども、それは決して無意味な行為ではない [...] (大橋 [1988])

対話集会の前日、対話集会の対応策について話し合った際、大橋は「生徒会顧問を“つるし上げる”ことによって、中央委員会の体面を保つしか選ぶ道はない」と述べた ([大橋 1988:114])。大橋 [1988] では名前が書かれていないが、この生徒会顧問というのは有宗義輝である。大橋 [2008] は、有宗の逝去にあたっての追悼記事で、「[...] 先生は折悪しく生徒会の顧問で [...] 全校集会でわれわれにつるし上げられたのである」とあり一致する。

11月24日、第2回目の対話集会が開かれた。ここでの主張は「リハ科は短大もしくは高等専門学校になるべきだ。理療科教師は開業以外の職域拡大になぜ努力しないのか」(有宗 [2011:135]) という点であった。

第2回の対話集会で専攻科としての動きはほとんど終わる。授業ボイコットもなくなる。大橋自身もこれを期に雑司ヶ谷闘争から「脱落」する。大橋 [1988:119] は次のように振り返る。

[...] 私は「雑司ヶ谷戦線」から脱落していった。その時の負い目を彗星の尾のごとく、今もなお私は引きずっている。細く、そして長く。(大橋 [1988:119-120])

こうして専攻科による闘争はおおよそ幕を閉じる。わずか2週間の「興行」であった(大橋 [1998:123])。

## 4 「高校生」の闘争

### 4-1 高等部普通科——「三療」から離れるということ

専攻科による闘争は、その後、高等部普通科・理療科・音楽科(以降、「高校生」と呼ぶ)に引き継がれる。むしろ、専攻科よりも激しい運動が起こったのがその運動においてであった。高校生側には留年生が2人出た。とくに継続的な運動を行ったのは、闘争が始まった当時に高校2年生だった学年である。

そもそも「高等部普通科」がおかれた環境は一般の高校から見れば特殊なものである。附属盲に「高等部普通科」が設置されたのは1960年のことであるから、闘争の12年前に新しく設置されたコースということになる。塩谷 [2011] は「高等部普通科」について次のように述べる。

「いよいよ来年度から普通科ができるんだって」。私たちにとって魅力的であると同時に、安易に口にはしてはいけない「タブー」でもあった。 [...]

「普通科なんかに進んで、その後どうするのか。大学行ったら教科書はないし、就職だって難しい。そんな危険な道を選ぶのはやめたほうがいい。理療科へいくのが一番安全な道だ」とアドバイスする先生や先輩も多かった。(塩谷 [2011:75])

理療科ではなく、普通科に行く。このことは「大学進学を目指す」ということと同義であり、三療とは異なる職業選択(新職業)を目指すことを指した。そこには「不安」とともに、憧れも存在した。ゆえにそれを口にするには「タブー」だった。

塩谷の学年で普通科に進学したのは「わずか3人」(塩谷 [2011:76])で、加えて点字教科書の整備も不十分で「普通科用の教科書は、自分たちでなんとかするしかなかった」(塩谷 [2011:76])。

宮内秀明は高校生による闘争の流れについて、中心的に動いていたのが高等部普通科2年の学年だったとしている。

そう、高3も高2も普通科生が中心だったんですが、俺たち高3はすぐ卒業したんで、高2がずーっと尾を引いてました。大学進学熱が高まってきましたし、ちょうど進路で悩む時期だったんで、なおさら長引いたんじゃないですかね。(大橋ら [2011:118])

#### 4-2 高校生の専攻科生への反発——高専分離問題

その「高等部普通科」で運動が引き継がれていったということは、どのような意味を持つのだろうか。そもそも時系列的にさかのぼれば、専攻科が運動を展開していた時期に高校生がなにもしていなかったわけではなかった。専攻科のそれとはたしかに異なるものの積極的な活動を行っていた。まずはそうした動きを見ていきたい。重要なことは「高専分離」問題である。指田は次のように述懐している。

70年のころは大橋さんが生徒会長で、私が高等部学生会会長になったのは71年で、あのころ何度も分離問題で話し合ったことを覚えています。[...] 高校生を度外視して進める、生徒会役員の専攻科生たちに対する反撥が強くなりましたね。(大橋ら [2011:119])

大橋 [1988:108] は当時の生徒会について、高等部普通科は専攻科生に「反発と気兼ねをしながらもそれに依存」し、反対に専攻科生は普通科生に対して「後輩たちと同レベルで扱われることを極度に嫌う」という「構造的ひずみ」ができていたとする。それは年齢的な差異もあったが、社会経験という意味でも差異があった。指田はさらに次のようなことも語っている。

生徒会でも授業ボイコットを決定して、高等部生にもスト突入の指示があった、とのことで、11月11日の土曜日に寮の自習室で高校生の役員が集まって話合ったんです。その会議で、専攻科生に引きずられるのではなく、とにかく学校へ行って自分たちの意見をまとめようと決めました。(大橋ら [2011:119])

専攻科への反発を背景として高校生側は、専攻科とは異なる動きであっても、自分たちの意思によって動くことを決める。そうした中で行われたのが「スト破り」だった。スト破りというのは、専攻科側が行おうとしていた授業ストライキを「破る」ための集団登校を行う、ということである。これはつまり、専攻科の闘争に反対し、それをやめさせようとする動きである。

寮の週番室には専攻科生もいるので電話をかけられません。手分けしてあちこちの公衆電話から通学生へ、「スト破りの集団登校」の連絡をしました。とても大変でした。(大橋ら [2011:119])

スト破りについて大橋 [1998:126] は次のように振り返っている。

十三日からの授業ボイコット要請にも高等部本科生は応じず、全共闘のピケを集団登校で突破していった。[...] 後になって全共闘のメンバーからその時の様子を聞いたのだが、彼らは皆無言でピケ隊に割って入ったという。それは、先輩たちの“過激な”行動に対する高校生の素朴な拒否反応の強さを暗示しているのだ。(大橋 [1998:126])

これらより「普通科」の闘争が専攻科に対する反発心を背景としてスタートしたことが分かる。しかし単に専攻科への反発心だけがあったわけではない。

濱田は次のように「スト破り」について述懐する。

[...] スト破りの連絡があったとき、大学で学園紛争などをやってきた2部専攻科の人たちが、平和な学校に騒ぎを持ち込んできた、という印象でした。H さん<sup>9</sup>が悪いのに、闘争にまで持っていくのは不本意だし、よくわからないのに巻き込まれるのがとてもいやでした。とにかく、授業が受けられないのは困る、と思いましたね。(大橋ら [2011:120])

これに対し、長澤は次のように述べている。

そうでした。授業ボイコットをするにも専攻科の人に言われるからやるんじゃなく、高校生は「主体性」をもってやるべきだ、とみんなで話し合ったことを私ははっきり覚えています。(大橋ら [2011:120])

加えて、濱田は次のようなことも語っている。

[...] ただ流されるんじゃなくて、自分たちが本当にできることは何なのかを探りたかった。自信もなかったし、閉塞感というのかある種の空虚さを感じてました。そうした自分を見つめなおす時期にちょうど重なっちゃって、闘争に拡大していったように思います。(大橋ら [2011:124])

まず根底に専攻科への反発心があった。しかしそれ以上に、高校生自体が「主体性」を持って行動をするのだという考えが強くあった。それは濱田の言い方では「閉塞感」や「ある種の空虚さ」を破るためのものであった。

#### 4-3 高校生の運動の展開

そして、高校生側に溜まっていた学校側への不満もここから「一挙に爆発」(大橋ら [2011:121]) する。長澤は次のように述べる。

そういう議論の中で、現在の盲学校は隔離教育で社会に出てからのことが不安だし、先生方は三療を押し付けるだけで、ちっとも新職業の開拓をしないじゃないか、などだんだん盛り上がっちゃって。不満が一挙に爆発した感じでした。(大橋ら [2011:120-121])

13日の午後、高校3年生らは教官側に対し「①処分を撤回すること、②処分経過を明らかにすること、③教官と生徒の対話なき教育を改善すること」などを中心とする『要求書』を提出したが、教官側からの応答は「処分ではなく教育的措置である」という点字用紙にたった1行書かれたもののみであった(大橋 [1998:126])。

同月25日には学校行事である「校内音楽会」が開かれる予定だった。これに対し、高校生2年および3年は「その時期ではない」「小中学部のみで開会してほしい」と教官側に申し入れる(大橋 [1998:128], 有宗 [2011:137])。しかし、教官側がこれを拒絶したのに対し、高校2年および3年は音楽会のボイコットを行った。

ここで、高等部普通科2年16人中13人と音楽科生2人のあわせて15人が「普・音教育闘争委員会」を結成する(大橋ら [2011:121])。

ただし、普通科の16人のうち委員会に参加しなかった3人は主体的に授業に参加していた。闘争に対して明確な反対を表明したわけでもなかった。

濱田：[...]高3になると、いつまでも話し合っても解決策が出てくるわけじゃないんで、だんだん授業に復帰するようになっていったんです。普通科16人のうち、3人は闘争に参加しないで授業を受けてましたから、結果的にはそこに合流する形でした。

長澤：3人ははじめから「主体的に授業を受ける」といって、最後まで信念を彼らなりに通しましたよ。

濱田：あの雰囲気ですべてを受けてたんだから、すごい意思よね。(大橋ら [2011:128])

#### 4-5 小宮本連合と文集運動

12月1日から4日までは定期試験があったが、高等部普通科の3名がこれをボイコットする。この3人の頭文字をとって「小宮本連合」と称し、論集『自己の出発点』を同月8日付で発表した(大橋 [1998:137])。この「小宮本」というのは、小川晴士、榎本衛、宮内秀明の3名である。彼らは3人とも弱視者である。同じクラスであった指田は次のように振り返る。

僕も含めて点字使用者は、それまでの漠然とした弱視ゆえの悩みなどを初めて突きつけられた思いでした。それが、その後の弱視者問題研究会の結成や、日本盲大学生会から視覚障害学生問題を考える会に引き継がれた、大学受験における「マークシート方式の改善」運動などに繋がっていったという気がします。(大橋ら [2011:126])

「小宮本連合」の一人であった宮内は次のように述べている。

[...]学校は、年齢や発達段階に応じた障害保障をしてるのか、ハンディを補う情報提供をきちんとしてるのか、それらをカリキュラムとしてどう位置づけてきたのか、と怒り沸騰。附属盲は試験でふるい分けているから、学校にとって都合のよい生徒しかいないといえるだろうが、その中でもひとりひとり違う要求を持っているんだということを、強く訴えたかったんだ。(大橋ら [2011:126])

12月20日に高等部普通科3年は文集『俺たちの声』を発表する。これは「小宮本連合」の行動に触発された高校3年生らがクラス全体の文集を作ろうとしたものであった(大橋 [1998:137])。以下は『俺たちの声』に書かれた文章である<sup>10</sup>が、有宗 [2011:137]はそれを代表的な声としている。丸括弧内は筆者による注である。

[...]さて中学へ入って、(全盲である)私は(自分を手伝ってくれる)弱視(の人)や家族に配慮し卑屈になっている自分がいやになり、全盲でもやればできるんだと思って自分を変えることを試みた。けれど白杖のつき方、使い方すら教えてもらったことのない私はやはり一人では歩けなかったし、うちの近くでは家族が白杖をつくことに偏見を持っていたのでそれを破ることもできなかった。家庭科でお料理を習っても、肝心の味付けや火を使うところは弱視にしかさせないのでなんにもならないし、うちでも危ないからと何もさせてはくれなかった。(有宗 [2011:137])

こうした文集運動の他に、普通科生らはアルバイト活動や教員との話し合いを重ねていく。例えば、濱田は次のように述べている。

[...]議論を重ねる中で、どうしても空理空論になってしまうように感じたんです。[...]結局、実際にやってみないとわからないよね、という話の展開になりました。私は冬休み、関さんとデパートのレストランへ皿洗いに去了。(大橋ら [2011:123])

また、当時の学校全体の雰囲気について、宮内は次のように述べる。

当時の学校全体に、よほどできる人以外は、「何かいってもきいてもらえないし、何をやっても無駄だ」という雰囲気が蔓延してた。それに対して、小さいけど風穴を空けた点は、自信を持って良いと思うんだよね。(大橋ら [2011:124])

宮内が述べるように普通科生の運動では、無力感を払拭することがひとつの目標になっていたと考えられる。また、濱田が言うように、専攻科のような運動では「空理空論」で何も変わらないということがあっただろう。その前の段階として、自分たちの可能性を確かめたいという動機が強かったとも考えうる。

教員との話し合いについては長澤が次のように述べている。

理療科の阿佐博先生との話では、小さい頃から近所の子どもたちと鬼ごっこをしたりもして、十分な社会性を身に着けたとおっしゃったんで、みんなが「じゃあ、今の盲学校の隔離教育をどう思っているんですか!」とハイテンションで質問したりしました。物理の小島喜一先生が、「視覚障害者に欠けていることは、歩く・作る・読む・遊ぶことだ」と言われたのが今でも印象に残っています。(大橋ら [2011:121])

その後は、専攻科、高校生も含めて全体として闘争は下火となっていく。「学年末も近付き、生徒たちの留年を懸念する気持ちなどもあって、次第に授業も正常化され、なんとも結論の出ないままにこの紛争は終わりを告げたのである」(有宗 [2011:136])。

## 5 考察

### 5-1. 考察の概要

本論文の目的は、普通科を中心とする高校生の闘争に着目することによって、雑司ヶ谷闘争を再検討することにある。

少なくとも専攻科においては、三療教育の不備を糾弾する闘争として、この闘争は顕在化した。これはたしかなことであるが、この側面だけを見てしまうのは、雑司ヶ谷闘争を三療問題のみに矮小化してしまうことでもある。普通科を中心とする高校生の闘争の主軸は「盲学校の外」を自分なりに模索するというところにあったから、三療問題は直接的な背景とは言い難い。

このように雑司ヶ谷闘争を捉えたとき、杉野 [1997] の雑司ヶ谷闘争を「自立と依存のジレンマ」を背景とした闘争と見る立場はやはり的を射ている。雑司ヶ谷闘争の全体を見れば、盲学校／盲教育に依存するのではなく、自立した個人として「三療」ではない新たな道を模索しようとする闘争だったと考えられ、「三療問題」を中心とする盲学校／特殊教育への批判はその一部分として行われたという側面の方が強い。それに「自立と依存のジレンマ」を当てはめる見方には説得力がある。本論文はこのことを一次資料に基づいて実証したものと言いうる。

### 5-2. 専攻科と高校生の闘争の差異——挫折と可能性

雑司ヶ谷闘争には、2つの主体があった。専攻科と普通科を中心とする高校生である。この差異が重要である。

この2つの主体の差異は具体的には「課題の具体性」と「闘争の期間」に表れている。専攻科の闘争は「三療問題」を具体的な課題として掲げた。他方で、高校生の闘争は特定の問題を解決しようとするものではなく、具体的な課題を持たなかった。期間の観点からは、専攻科の闘争が短期間（およそ2週間）で終わった一方で、高校生の闘争は1年半以上に渡って続いた。

では、このような差異はどこから生まれたのか。両者はそもそも盲学校の中で、定められた「あはき」という職業に就くための教育を受けることへ不安を抱えており、少なからず盲教育への不満を持っていた。それは「三療問題」という言葉で示されるものである。専攻科において三療問題は、自らの就職・経済的自立に直結した問題である。

しかし、その問題は専攻科だけのものではなく大学進学による「あはき」以外の道を進もうとした普通科にも共有されている。つまり「三療問題」を具体的課題とする、既存の盲学校／盲教育に対する不安や不満は両者に共通したもものとして存在しており、これが闘争の背景にあった。

しかし、両者には明確な差異がある。専攻科生は、不安と不満の中で、その三療という道を結果として選んでいる。専攻科で三療を学ぶことは、結果としては「三療」を生業とする可能性を大きく高める。他方で、普通科生は普通科に進学し大学へ行くことによって、「盲学校の外」へ出ようとしていた。三療以外の職業に就く（盲学校の外へ出る）ことができる可能性は、専攻科の方が低く、普通科の方が高い。この差異が、闘争における差異を生み出したのではないか。

専攻科の闘争は三療問題を掲げたものであり、期間は短いものだった。このことから、専攻科の闘争が「挫折」に終わったものと解釈することができる。三療問題はそれを解決することが少なくとも短期的には困難である。その課題解決の難しさゆえに、その闘争を継続させることができなかつた。その意味での「挫折」である。大橋 [1988:119] が「私は『雑司ヶ谷戦線』から脱落していった」と述べるのは、その象徴的なものだという。

他方で、高校生の闘争は長期に渡った。それは普通科生にとって、盲学校の外へ出ることは、自らが様々な形で自立の道あるいはモデルケースを作ろうとするものだったからである。濱田がデパートへ皿洗いに行ったように、自らが主体的に「三療」ではない盲学校の外の道を探し、実践し、確立しようとするのが普通科を中心とする高校生の闘争だった。そこには集団としての具体的な課題はないが、しかし、進む道が多様で有りうるという可能性が開かれている。それゆえに闘争が持続した。このように整理しうる。

### 5-3. 二つの主体の相互作用

専攻科と高校生の闘争の相互作用によって雑司ヶ谷闘争が生じたことは、闘争を捉える上で重要である。

専攻科には、一度社会に出た、あるいは大学に行ったが手に職をつけるために戻ってきた者がいた。雑司ヶ谷闘争は、そうした者が、外から盲学校に持ち込んだ闘争であると捉えることができる。直接的なモデルとされたのは「全共闘」運動であろう。ただし、闘争が広がる土壌として、盛んな生徒会活動や生徒らの自治意識があったことは見逃すことができない。実際に、三田に対して学校が直接処分したことを、生徒会自治への侵害として問題化したことがきっかけである。それは附属盲の生徒による自治性を示す証左である。

専攻科の闘争は三療問題を中核とする盲学校に対する問題提起であった。当初、高校生はそうした動きに反発しており、「スト破り」をしている。それは先に述べたように専攻科が外から持ち込んだ闘争という意味合いが少なくとも初期においては大きく、高校生からすれば「平和な学校に騒ぎを持ち込んできた」（大橋ら [2011:120]）ように見えたからだろう。しかしそれは、専攻科生の問題提起に対して、高校生らが「自分たち」の考えをもって応答した結果としての反発でもある。

つまり、普通科を中心とする高校生の闘争は、専攻科による盲学校に対する問題提起を抽象的に受け取る形で生じたものと捉えうる。専攻科の闘争が高校生たちの中にくすぶっていた不満や不安に火をつけ、その熱量は、可能性が開かれているという普通科の特性ゆえに持続しえたということである。

このように捉えるならば、専攻科と高校生の闘争は反発や対立という形で単純化することはできない。そこに反発心があったことはたしかだが、それは闘争を冷ややかに見るものではなかつた。結果として高校生らは専攻科の闘争を肯定的に捉え、そこで問題化された盲学校の「自立と依存のジレンマ」に対する批判という方向を受け継ぎ、さらにその解決策を自らが模索するという闘争に変化させている。このように雑司ヶ谷闘争は、単に「三療問題」を背景とした闘争としてではなく、その相互作用を起点として捉えられる必要がある。

## 6 おわりに

これまで先行研究が検討してこなかつた雑司ヶ谷闘争における「普通科」の闘争の存在に着目し、雑司ヶ谷闘争の再検討を試みた。専攻科と普通科の闘争には課題の具体性や持続性の側面で差異があると同時に盲教育への不安や批判を背景に、新たなあり方を模索しようとする点では通底していたことを明らかにした。

この雑司ヶ谷闘争そのものは、劇的な変化をもたらした闘争であるとは言えない。少なくともその闘争の一部は「挫折」に終わっている。しかし、1970年代の初頭に盲学校の生徒らが教育やそれを支える構造に対して痛烈に批判をし、自ら行動を起こしたことは、その後の盲教育に影響を与えていることはたしかである。それらを見過ごすことはできない。

1970年代は盲学校や障害児教育を変革しようとする運動や闘争が勃興する時代であった。雑司ヶ谷闘争はその最初期の闘争であり、代表的な闘争の一つであると考えてよい。「雑司ヶ谷闘争」から約5年後、東京教育大学附属盲学校を中心とした大きな闘争が起きる。「筑波技術短期大学設置反対闘争」である。雑司ヶ谷闘争の中心人物である大橋由昌や有宗義輝などはそれに深く関与している。

本稿によって、それらの「一連」の闘争の流れを明らかにする足がかりができた。その流れを遡り、それらの闘争の様相を明らかにすることを今後の課題としたい。

## 注

- 1 雑司ヶ谷闘争のすべてを全共闘運動と呼びうるかは留保すべきであるが、すくなくともその一部は「全共闘運動」と位置付けうるだろう。具体的には闘争の初期においては明確に「全共闘」と名乗ったものの、次第に「全共闘」とは名乗らなくなっていった。
- 2 有宗義輝は、1943年11月24日生、2007年11月30日咽頭がんにて逝去。
- 3 こうした「飛び火」は和歌山県立盲学校以外でも起こっていた可能性はあるが、明らかになっていない。
- 4 「三田純一」という仮名は大橋 [1988] が用いたものであり、それにならった。
- 5 大学に入り三療以外の道に進もうとしたが、結果として三療に「戻る」ことは、その後も続いているようである。青山 [2003] は筑波大学附属盲学校（雑司ヶ谷闘争がおきた東京教育大学附属盲学校を前身とする視覚特別支援学校）の進路について次のように述べている。「全国の盲学校からの大学進学者の半数ちかくを占めている筑波大学附属盲学校の資料[...]から分析すると、三療関係への進路変更が15.1%を占めている。このことは大学で専門知識を身につけ視覚障害者の新しい領域にチャレンジしたがかなわず、その結果就職は三療の途しかないと進路変更したことを意味している」（青山 [2003:4]）。
- 6 理療科教員のライフヒストリー研究を行った佐藤 [2010] は、普通科の教員と理療科の教員（その多くが視覚障害当事者である）の間にある非対称な関係を指摘している。教員どうしても当事者／非当事者を軸とする非対称性があった。
- 7 大内が全共闘準備会の会長に選ばれたのは、病院勤めの経験があり、やや年長であったこと、学校当局に対してそもそも批判的な立場にあったことが理由であろう。
- 8 「学校の外」での就業経験があった者がどの程度いたかは定かでない。
- 9 本稿における三田純一のこと。Hさんは仮名である。
- 10 原文を直接参照したものではなく、有宗 [2011:137-138] によって引用されたものである。

## 文献

- 青山祥一 2003「視覚障害者の就労支援——視覚障害者支援センターを中心とした就労支援について」、『地域政策研究』5 (4):3-9.
- 有宗義輝 2011「雑司ヶ谷闘争を振り返って——本校における学園紛争」、『なずれば指に 明きらけし——筑波大学附属盲学校記念文集』, 社会福祉法人桜雲会 134-133.
- 岩崎洋二 2011「筑波大学附属視覚特別支援学校の歴史」、『なずれば指に 明きらけし——筑波大学附属盲学校記念文集』, 社会福祉法人桜雲会 3-18.
- 大橋由昌 1988『盲学生憤闘記 キャンパスにオジサンは舞う』, 彩流社.
- 2008「(特別寄稿) 有宗義輝先生の死を悼む!」, 『点字ジャーナル』第39巻3号(通巻第454号), URL:<https://www.thka.jp/shupan/journal/200803.html>.
- 大橋 由昌・指田 忠司・長澤泰代・浜田登美・宮内英明 2011「雑司ヶ谷闘争を振り返って」, 『なずれば指に 明きらけし——筑波大学附属盲学校記念文集』, 社会福祉法人桜雲会 117-139.
- 加藤康昭 1994「日本の障害児教育成立史に関する研究——成立期の盲聾啞者問題をめぐる教育と政策——」, 『茨城大学教育学部紀要(教育科学)』43: 125-142.
- 楠敏雄 2011「楠敏雄さんへのインタビュー(その4)」, 立命館大学生存学研究所, URL:<http://www.arsvi.com/2010/20110306kt.htm> (2022年9月5日).

## 山口 盲学校における学生運動の様相

- 佐藤貴宣 2010「〈進路問題〉をめぐる教育経験のリアリティ——盲学校教師のライフヒストリーを手がかりに」,『解放社会学研究』23: 31-48.
- 塩谷靖子 2011「木造校舎での青春」,『なずれば指に 明きらけし——筑波大学附属盲学校記念文集』, 社会福祉法人桜雲会 75-79.
- 杉野昭博 1997「「障害の文化」と「共生」の課題」, 杉野昭博ら編『岩波講座文化人類学 (8)』, 岩波書店 247-274.
- 筑波大学附属盲学校同窓会・後援会 編 2011『なずれば指に 明きらけし 筑波大学附属盲学校記念文集』, 社会福祉法人桜雲会.
- 能澤義和 2021『マルファン症候群と共に生きる』, バレード.
- 広瀬浩二郎 1997「障害者の宗教民俗学」, 明石書店.
- 2005「バリアフリーからフリーバリアへ: 近代日本を照射する視覚障害者たちの見果てぬ夢」,『文化人類学』70 (3):379-398.
- ぶくぶくの会 2014「特集: 楠 敏雄—その人、その仕事、その思想 交渉の達人・人権の見張り人・ロマンチスト」, URL:[http://www.puku-2.com/manekineko/news/news148\\_1.htm](http://www.puku-2.com/manekineko/news/news148_1.htm) (2022年9月5日閲覧).
- 吉田重子 1997「視覚障害者の就労の現状と課題」, URL:<http://www.turtle.gr.jp/paper/yoshida1.html> (2022年9月5日閲覧).

# Antiestablishment Movement among Visually Impaired Students: Reconsidering the Case of the School for the Blind, Tokyo University of Education

YAMAGUCHI Kazunori

Abstract:

Zoshigaya Fight (*zōshigaya tōsō*), which began at the Tokyo University of Education School spread for the Blind in 1972, is one of antiestablishment movements among visually-impaired students spread from the 1960s to the 1980s throughout Japan. This paper examines the *zōshigaya* fight dividing student protesters into two groups by underlying motives into two groups: students who argued a non-degree course to learn the skills of *sanryō* (three treatment of massage, acupuncture and moxibustion) and those who did not take a regular course. I focus on the students in the regular course in order to analyze the cause of the fight, which cannot simply be simplified to frustration of students in the non-degree course. The reason that the students in the regular course participated in the protest was also to seek their career options outside of the School for the Blind. The *zōshigaya* fight is attributed to criticism to the entire education for the blind, and the issue of *sanryō* was part of it. The study concludes that the *zōshigaya* fight is a protest movement for aspiring for freedom 'out of the school for the blind' as a whole.

Keywords: Disability Movement, School for the Blind, Three Therapy (*sanryō*), Independence and Dependence

## 盲学校における学生運動の様相

——東京教育大学附属盲学校における事例の再検討——

山 口 和 紀

要旨:

「雑司ヶ谷闘争」は東京教育大学附属盲学校で1972年から起きた、1960年代から80年代にかけて日本全国で起こった障害者による社会運動の一つである。本稿では「三療（はり・灸・あんま）」を学ぶ専攻科と、それを学ばない普通科の2つに闘争の主体を分け、同闘争を再検討する。この普通科に着目する目的は「三療」教育への不満では説明できない闘争の要素を分析し、闘争を再検討することにある。雑司ヶ谷闘争についての先行研究では、三療問題が背景にあったことが指摘されているが、その検証は十分でない。本稿は闘争の背景が単に「三療」問題だけに単純化できないことを示した。普通科の闘争は盲学校の外に出る道を模索するものであった。雑司ヶ谷闘争は盲学校そのものに対する批判が背景にあり、三療問題はその一部であったと考えられる。本稿は雑司ヶ谷闘争を全体としては「盲学校の外」を希求する運動であったと結論付けた。